

全日本自閉症支援者協会研修大会 三重大会

『我が事・丸ごとの地域づくりと自閉症支援』

10月22日23日の2日間、三重県津市でおこなわれた、全日本自閉症支援者協会主催の研修大会三重大会に参加させていただきました。

津市は、北海道の9月中旬ぐらいの気温で大変過ごしやすかったです。(ずっとホテルの中でしたが)

今回のメインテーマが「我が事・丸ごと」という講壇される皆様も言われておりましたが難しいテーマだと思います。

もともと核家族や共働きなど家庭・地域を取り巻く環境が変わり、関係性が希薄になる一方で、困難を抱えた方を「他人事」とは思わないで、自分の事として、地域住民が支えあう地域社会を目指すという介護分野からの発想だったと思います。

介護・老人は、誰もが将来なる、または自分の両親なども身内もなり自分の事として考えることは、そう難しくないことかもしれません。

研究大会初めは全自者協の松上会長の「基調講演」があり、私たち自閉症支援者協会の今後と役割として全自者協の成り立ちから変遷・そして今後の役割とお話しをしてくださいました。全自者協がおこなっているスーパーバイザー研修などより専門的な人材の育成や地域における核となる専門機関がブロックごと、様々なケースに対応できるように連携強化する。自閉症・発達障害者の制度などについて関係機関と連携して提言する。そして支援する私たちも障害の理解が進んでいないところもあるが、合理的配慮の支援を構築して地域に発信していくことが求められるとお話しされていました。

記念講演では大正大学心理社会学部 臨床心理学科教授 内山先生が、中年期から老年期を中心として自閉症（アスペルガー）の人の支援と題してお話しをしてくださいました。

講演の対象者が知的に障がない自閉症の方を中心にされていましたが、「ご本人の抱えている負担の軽減」「肯定的なかかわり」「情報提供」「環境整備」など支援の根幹は全く同じかと思いました。また、先生の福島大学の教授時代に3.11の震災があり、その時の経験から災害に備えておくこととしてお話しもされていました。



- ・避難所となるところへの啓蒙・啓発
- ・地域の警察への啓蒙（存在を知ってもらう）
- ・保護者の負担が増大して虐待ケースなどが起こる可能性があるため、保護者のサポート
- ・薬の処方情報の確保※スマホなど
- ・避難訓練、事前提示など安心して受けることが大切。

2日目はシンポジウムと分科会

「我が事・丸ごとの地域づくりと自閉症支援」

～大会の趣旨から縦型から丸ごとへの転換改革が進められている
～のテーマで施設等の事業所・相談事業所の立場・保護者の立場からそれぞれお話しされております。

保護者の立場からは、我がごと丸ごとと言われているが、個人個人のニーズは何なのか？丁寧に見てほしい。と言われていました。

相談事業所の立場からは、障がい・老人など分野をきめない、誰もがちょっとした福祉の相談ができるような制度にのらない事をスタートしている

施設等の事業所からは、当法人のゆいの所長の佐藤から法人での地域で取り組みとして、農福連携の話や生活介護あらいぶで行っているワンコイン除雪などの紹介をさせていただきました。

三重大会の最後は分科会になります。

私が参加した「身体的な変容が生じた自閉症のニーズを考える」と題して、高齢等の問題としての機能低下に関するテーマで、全自者協の分科会では初のテーマであるようだった。

初めてのテーマと第三分科会が杉山先生の講演ということもあり、第四分科会は20名程度の参加でしたが、萩の杜のケースでは、甲状腺癌から喀痰吸引となるまでの過程（家族とのやり取りや施設で、どう対応していくかなどのプロセスが聞くことができましたし、岐阜の伊自良苑では、嚥下の問題について話されていた。年齢的には高齢というよりは40ぐらいの利用者について、鼻のカメラを入れて嚥下の状態を確かめるなど利用者の状態を客観的にたしかめて、利用者さんの状態に合わせた食事の工夫などされており、他人事ではない実感できる内容でした。

おわりになりますが、全日本自閉症支援者協会三重大会に参加させていただき、従来の自閉症・行動障害の枠には、収まらない様々なニーズがあることをわかっていたが改めて実感した。共生や我が事まるごと。内山先生もお話されていましたが、児童精神科ではあるが仕事の多くはアスペルガーを中心とした成人が多いなど発達障がい全般の支援。従来私たちが支援していた方々の高齢にともなう支援と法人の機能もジェネラリストが求められていると感じた。

